



明治43年建設当初の直方会議所

### ●直方会議所建築の特徴

直方会議所の屋根裏には棟札が残されていました。表には「上棟 筑豊石炭鉱業組合直方会議所 設立者 筑豊石炭鉱業組合 総長 安川敬一郎 設計者 長瀬兵馬 工事監督 桧和田房吉 筑豊石炭鉱業組合幹事 伊吹政次郎 筑豊石炭鉱業組合 井関讓吉 請負人 鴻池忠治郎 代理 仁科員一 大工棟梁 神門鹿治郎」、裏面には「明治四十三年四月二十日 吉祥」の文字が記されています。直方会議所は明治43年(1910)に建てられた、木造2階建の建物で、外壁は大壁の漆喰仕上げ、胴部には胴蛇腹、窓上部周囲に水平帯を廻し、東面・南面には暖炉の煙突が張り出した洋風の外観です。内観は幾何学文の天井が印象的で、各室によってデザインの使い分けが見られます。建築当初の各室の機能は、1階の3室が事務室・所長室・応接室で、2階が会議室でした。



建設当初の直方会議所前に集う関係者

### ●直方会議所で討議された内容

この場所で討議された議題は、石炭運輸問題、鉱山保安問題、鉱業法制問題、鉱夫労務取締規則の改正問題など多岐にわたります。特に、大正期の採炭制限による炭価調整は、後に石炭鉱業連合会によって全国に広がり、日本の近代経済史上でも特筆されます。現在のOPECによる原油価格の高下などと同じように、筑豊石炭鉱業組合による炭価の設定は、日本経済に多大な影響を与えました。



明治43年直方会議所棟上げ

### ●救護練習の内容

大正9年(1920)に新設された煉瓦造の模擬坑道には、実戦さながらの救護練習が可能で、さまざまな練習施設が設けられました。坑内の温度を上昇させ、煙を発生させる暖房設備、風橋を模した架橋の痕跡が残っています。模擬坑道では、救命器使用練習、落盤箇所の復旧のための枠入れ練習、ガス検出練習、被災者搬送練習などが行われました。

大正12年(1923)には、組合は従来の救助器練習会を変更して、筑豊石炭鉱業組合救護練習所を組織しました。このころから、直方会議所で行われる会議の使用頻度が徐々に少なくなっていますので、救護練習の講習に用いられることが多くなったようです。

昭和9年(1934)には、現在の新館の位置に平屋の連絡所が建てられ、救命器の組立装着室、修理室、酸素充填室などが設けられました。



隣接する御館山にあった石炭坑爆発予防調査所と爆発試験坑道



若松の組合本部事務所

### ●炭坑保安の拠点としての直方会議所

明治30年代末になると、技術の進歩によって300mを超える深い堅坑を掘削できるようになりました。しかし、それに伴ってより深刻な落盤、火災、ガス爆発などの事故が頻繁に起こるようになりました。明治40年(1907)、現飯塚市の住友忠隈炭坑火災の際、はじめてドイツ製ドレーガー式救命器(酸素呼吸器)が導入され消火作業が行われました。当時、明治鉱業の技術者であった石渡信太郎の提言により、筑豊石炭鉱業組合が複数の救命器を購入して備え付け、事故の際に貸し出すこととなりました。明治43年(1910)新築された直方会議所に土蔵(現石炭化学館)を設け、救命器を収納しました。このあと、直方会議所周辺にはさまざまな炭坑保安施設が設置されることとなります。

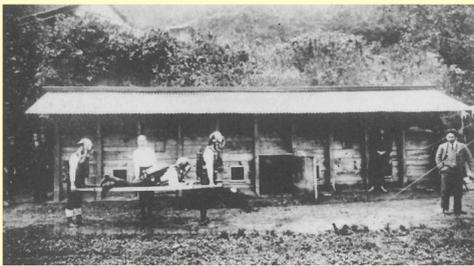


枠入れ練習準備

### ●日本初の救護練習模擬坑道

明治45年(1912)5月、筑豊石炭鉱業組合は、非常用器具練習室建設を決め、直方会議所内に長さ11mの木造の煙室兼練習室を造り、同年7月からは救命器練習会を実施します。この練習室は、輸入した救命器の機密性を検査するとともに、その使用法を練習するための施設で、わが国最初の救護練習模擬坑道と位置づけられます。

大正9年(1920)、多くの炭坑で救護隊を組織することが義務付けられます。組合は同年に一部鉄筋コンクリート造の部分をもつ、煉瓦造の模擬坑道を新設します。大正12年(1923)には、明治45年につくられた練習室と煉瓦坑道をつなぐ傾斜20度の木造の斜坑が増設されて、全長約93.4mとなり、おおむね現在の規模に近い設備となります。



明治45年建設の煙室兼救命器練習室

### ●安全灯試験場と爆発試験坑道

このころ頻発していた炭坑ガス爆発の一因が不完全な安全灯にあるとされ、安全灯試験場の設置が要望されていました。さまざまな協議を経て、組合が直方会議所隣接地の御館山山林内に施設を整備し、当初は政府が人員を配置することとなりました。試験場の開所は大正4年(1915)5月でした。組合は、大正6年(1917)11月に爆発試験坑道を設置。また、名称も石炭坑爆発予防調査所に改称しました。しかし、用地が狭く拡張性がないこと、市街地に近接しており爆発音による苦情が多かったことなどから、昭和3年(1927)3月、直方市頓野の筑豊鉱山学校の隣接地に移転しました。予防調査所の跡地は多賀公園となりました。



筑豊鉱山学校校舎

### ●筑豊鉱山学校

炭坑の大規模化、機械化が進んだ明治後期には、専門技術者の養成・確保の必要性が高まりました。大正7年、鞍手郡頓野村村議会は学校誘致を決議。大正8年2月建設中の校舎が放火により焼失するという事件がおりましたが、同年5月には無事開校しました。初代校長には京都大学で教鞭をとっていた山田邦彦博士が就任しました。同校は本科(修業期間1年6ヶ月、定員50名)があり、大正10年からは別科(修業期間6ヶ月、定員50名)が設けられました。実習を重視した教育方針がとられ、同年入学の本科生からは救命器使用、変災(災害)善後処理練習などもとりいれられました。卒業生は全国各地の炭坑だけでなく中国大陸の炭坑でも活躍しました。戦後は福岡県立筑豊工業高校となりましたが、平成17年(2005)3月、統廃合により閉校。跡地には県立筑豊高校が移転しています。

### ●筑豊石炭鉱業会とその後の救護練習所

筑豊石炭鉱業組合時代、救護練習所では近隣の糟屋炭田、九州帝国大学のほか、東京帝国大学、京都帝国大学、早稲田大学の学生や唐津炭田、宇部炭田、石狩炭田、中国撫順炭坑などからも練習生を受け入れていました。当練習所の先進性を示すものです。組合は昭和9年、社団法人筑豊石炭鉱業会に改組し、直方会議所及び救護練習模擬坑道も鉱業会の所属となります。昭和16年(1941)には、戦時体制に臨んで筑豊石炭鉱業会は解散し、石炭統制会の管轄となりました。戦後は九州石炭鉱業会の管理となり、九州炭鉱救護隊連盟直方救護練習所と称しました。この時期には、直方会議所の建物も完全に練習施設となり、三井三池鉱を含む福岡県内一帯や宇部炭鉱等からの救護訓練を受け入れましたが、救護練習所が粕屋町に移転することとなり、昭和43年(1968)12月練習所を閉鎖。約半世紀の歴史を閉じることとなりました。

直方の救護練習模擬坑道では、少なくとも延44,638名が救護練習を修めました。日本石炭協会九州支部は、直方救護練習所を石炭記念館に改装し、直方市に寄贈。昭和46年に直方市石炭記念館が開館しました。



被災者運搬練習



架橋通過練習



九州石炭鉱業協会 直方救護所平面図より (昭和23~26年)



ガス検知練習



張出し練習

### ●救護練習模擬坑道の広がり

明治45年(1912)、直方会議所に隣接して建設された木造の煙室兼練習室は、わが国最古の救護練習模擬坑道に位置づけられるものです。大正3年(1914)、田川郡の三菱方城炭坑で687名、北海道の若鍋炭坑で423名という大きな犠牲を出すガス爆発事故が相次ぎます。このことを重く見た政府は、石炭坑爆発取締規則を公布し、危険性の高い指定炭坑では救護隊を組織することを義務付けました。規則は、救護隊の組織まで5年間の猶予期間を設けており、その間に救護隊の設備や組織を整備するよう求めました。筑豊石炭鉱業組合では、大正9年(1920)に約65mに及ぶ煉瓦および鉄筋コンクリート製の模擬坑道を新築し、傘下の指定炭坑による共同救護隊の救護練習を開始します。三井田川鉱業所では、大正4年(1915)には救命器練習室を設置、大正11年(1922)には総延長72.4mの模擬坑道を建設し、単独救護隊による救護練習を実施しました。三井三池炭坑では、同時期に使用しなくなった発電所や実際の坑道を利用して救護練習を行いました。また、常磐炭田や石狩炭田、釧路炭田などでも、模擬坑道が設置されました。

今日でも、中国やインドネシアをはじめ、世界各地に「坑内掘り」の炭坑があり、事故がおきています。現在、ここ直方をはじめ日本で培われた炭坑保安技術が活用され、多くの人命を救っているのです。



救護練習模擬坑道全景